黎明紙第1号御研鑽

新しき出発を迎えて

本年は黎明教会にとりまして、教会設立のお許しを頂きましてより、丁度五年目を迎えさせて頂いたわけであります。この間に、数々の絶大なる御守護を賜わりました。大神様、明主様に対し皆様と共に、心より感謝の祈りを捧げさせて頂きたいと存じます。また信徒の皆様方の誠意あふるる御努力により、教会も一歩々々発展充実のお許しを頂いて居りますことを、心より感謝申上げる次第であります。

私共は、これから名実ともに、明主様の御心にかなった教会にならせて頂くべく、希望にみちた第一歩をふみ出さ

せて頂いたわけであります。そこへ、思いもかけなかったことでありますが、已に信徒の皆様方も御承知の通り、

この度諸般の事情によりまして、世話人幹部の方々とも相談の結果、私共の教会は教団との包括、被包括関係を解消させて頂くことになったのであります。この点に関しまして、月例祭・世話人会・その他種々の集まりの都度お話して参りましたが、この機会に今一度、私共黎明教会の今後の進むべきあり方等につきまして申し上げたいと思います。

この度のことにつきまして、私共の気持は「明主様への純粋なる信仰をつらぬかせて頂きたい」「明主様の御教えにもとずく信仰の自由を守らせて頂きたい」と言う信仰上

の理由以外に他意は全くないことを、先ず明確にさせて頂きたいと存じます。

私共の信仰の究極は、勿論、人間及び宇宙の万物の創造者であり、

且つ主宰者であられる主神であることは言う迄もありません。また、主神が、その御目的である真善美完き理想世界・地上天国を建設されるにあたり、愈々天の時来って、一人でも明主様というかたを選び給い、その救いの大業を行なわせられるわけであります。

明主様こそ、主神から、その直接的な救いの御力と、御教えをゆだねられ、人類救済の大使命を帯びて出顕された方であると私共は固く信じさせて頂いて居ります。

私共の信仰の根底に、この点が、しっかりと確立されていなければ、他のことが如何に立派に見えても、その信仰は根なし草、砂上の楼閣と申しても過言ではないと思います。

明主様が説かれましたぼう大な御教えの数々は、主神直接の啓示によるものであり、明主様が感得された主神の真意を示されたものであります。

主神は、明主様を通して、真理の深奥を説かれ、人類最後の救いを実行されると共に、新文明世界設計に就いての指導をも併せ行われているのであります。

私共信徒は、御教えを神様の御救いの言葉として魂に謙虚に頂き、常に御教えをすべての基準とする姿勢を守らせて

頂くことこそ、如何なることにも優先する信仰の基本的なあり方と上げられると思います。

かつて、明主様のおそばで御奉仕されて居られた方の手記を拝見致しましても、明主様が如何に御論文の御執筆に力をそそがれたかを拝察させて頂けるのであります、

正月の三か日に於いてすら、御一人で静かに御論文の御推敲や整理をされた。

明主様、劇しい御浄化の時すら御口述を休まれなかった。

明主様、もうこれ以上平易な説き方はないというところまで御推敲になられ、多い時には二十回以上も訂正をなされた。

明主様、この明主様の御心は、恐らく世の中の人々を一人でも多く、また1分でも早く、神様の御救いの教えによ

って救おうとされることにおありになったに違いないと思います。
明主様のこの御心にお応えすべく、私共は全身全霊をお捧げすべきであると思います。
しかし、御昇天後、已に十五年を経過致しましたが、私共は、明主様の御心にどれだけお応えさせて頂いてまいったでありましょうか。勿論、その間にはいろいろな止むを得ない事情もありましたでしょうし、誰それの責任と言うことも申上げられないことであります。殊に、信徒の皆さんには、何一つ責任のないことであります。
また私はこのために、血のにじむ様な努力をしてこられた先達の方々も知って居ります。

しかし、今、私自身をふりかえらせて頂いた時、私の気持は申訳なさで一杯であります。

私共は、ここで何としてでも、明主様に対する信仰・御教えにもとずく確固たる信仰を確立させて頂かなければならないと思います。

明主様を救い主として仰ぎ、明主様の御教えを神様の御救いの言葉として頂き、教えをすべての基準とさせて頂くという信仰の根本姿勢が、この十五年間にくずれがちであったことは、否み得ない事実であり、ややもするとその傾向は、一層強まった感すら致すのであります。

しかし、それら過ぎ去ったこと、もしくは個々のことに関しまして、あえてここで申し上げることは本意ではあり

ません。それよりも、私共は、これから、五年十年否、更に遠い将来の為に、私共の信仰の根本を、この際早急に確立させて頂かなければならないと思います。明主様の御教えにもとずつく信仰をつらぬかせて頂くために私共は、法的にも守られた立場をとらせて頂くべくあえてこの度の道をえらばせて頂いたのであります。

なお、私共は組織に関する問題を云々する気持は毛頭ありません。御神業が発展するために、組織が有効な働きをもつことは明かなことであります。しかし、そのもとである信仰の根本が確立していなければ、その組織は十分な働きをしないのみか、ともすれば既成宗教がおちこみがちであった「形だけの信仰」になってしまうと思います。組織

や施設がいくら立派になっても、その時は、もはや真の宗教としての使命を果すことは困難であると言えましょう。

明主様が天国の雛型として造られた聖地を私共はどこまでも尊び、お守りしていかなければなりません。

しかし、そのためには、明主様に対する信仰が確立させて頂いて居なければ、不可能なことであります。一明主様は、かつてご自身の救い主としての証しについて話され**『これだ”という所までゆけば魂がすっかり固ったのですから、そうするとそれによってその人の力が強くなるのです』**。また**『これからは、想念の世界である』**とおっしゃって居られます。更に、お側の方には、何かにつけて**『御教えを読んでいるか』『御神書を読みなさい』**また**『私を**

見つめていればよい。よそ見してはいけない』と仰せられたと承って居ります。

今こそ、私共は明主様に対する純粋なる信仰、御神書にもとずく信仰の自由を確立させて頂かなければならないと思います。

更に、具体的なことは、常に御教えにもとずき、明主様は、その問題をどの様に解決されて居られたかということを基準に、一歩一歩誤まりなきよう、進んでまいりたいと存じます。信徒の皆様方とのお話合いの機会も出来る限りもたして頂きたいと思います。この度のことは、世話人幹部の方々と御相談の結果、決意させて頂いたことでありま す、，責任はすべて私にあることは勿論であります。

今後は信徒の皆様方の心よりの御理解と、御協力により、私共の教会が、明主様よりお許し頂きましたその使命を十分に全うさせて頂けます様、全身全霊をうち込み、明主様に対する敬慕の念は決して変わることはありません。また明主様の御理想達成のために、日夜努力されて居られるすべての方々と共に、

手をとりあって進ませて頂き、一日も早く、明主様に対する御教えによる純粋な信仰の確立を目ざして、一層の精進努力をお誓い申上げる次第であります。